〈 2. 特集 行く・読む 〉

2-2.「ひきこもり」の当事者活動の消滅と生成、変容、ネットワーク化

伊藤 康貴

当事者活動の活発な状況

筆者は、2011 年より、主に関西地方の「ひきこもり」支援機関、とくに当事者が主体的に活動を担っている自助グループやフリースペース、居場所などの「ひきこもり当事者活動」に、ひきこもった経験を持つ一人の「当事者」として、参与観察を行っている。足掛け 5 年ほど、当事者活動を中心として、いわゆる「ひきこもり界隈」に足を突っ込んでいるわけであるが、その間に、当事者活動としての実践は、かなり活発化してきたように思える。これまで主にやられてきた自助グループやフリースペースだけでなく、「ひきこもり大学」やフューチャーセンター【写真 1】など、当事者の仲間内から外部の一般社会に向けて、ある種の社会運動的に自らの考えを発信する試みや、あるいは「べてるの家」に代表されるような当事者研究を取り入れて、自らの症状や状態の改善、もしくは自らの生き方やアイデンティティを、当事者同士で研究することを通じて問う試みがなされ始めている。



写真 1
フューチャーセンター・セッションの一コマ。アイデアを付箋に書いて模造紙でまとめている。

当事者活動の維持の難しさ

新しい試みが各地でなされ始めている一方で、活動を休止ないし終了する当事者団体も、やはり目立つようになってきている。

当事者活動は、その活動の中心メンバー、とくに代表となる人物の負担が大きくなる傾向にある。会場準備や日程調整などといったハード面における細かな作業から、参加者への配慮、参加者同士のトラブルへの対処といったソフト面の神経質にならざるを得ない運営など、とくに一人で回している場合は結構な負担となることがある。

中心メンバー自身も、変化していく存在である。日々の仕事や生活が忙しくなるにつれ、当事者活動に力点が置けなくなることもある。新しく就いた仕事に忙殺されると、これまでやってきた当事者活動に時間を充てること自体が難しくなる。毎週、毎月の定期的な活動が、中心メンバーの今後のキャリアとかみ合わない。もちろん、社会における労働環境や人々の生活のあり方が問われるべきだが、その一方で、中心メンバーの生活自体も考慮されるべきであろう。

「当事者」カテゴリーのミクロ・ポリティクス

当事者活動を継続し、参加者が増えていくにつれて、当事者同士のコミュニティで形成される、ある種の階層性も鮮明になってくる。当事者活動には様々な当事者が参加してくる。久しぶりに人と会う人もいれば、職場や家庭で居場所がない人が居場所を求めてやってくることもある。それぞれが抱えている問題も、多岐にわたる。発達障害や統合失調症、社会不安障害といったメンタルヘルス系のものから、失業や厳しい労働環境といった社会的・経済的なものの他、家族問題やジェンダー、セクシュアリティ、自身の身体性などなど。複数の問題を抱え込んでいる人も多い。

また、常連であっても、時間を経るにつれてその人の状況は変化してゆく。就職した人、結婚した人も出てくる。そのような人に対する他の当事者からの羨望のまなざしもある。変化してしまった当人自身が、当事者活動に参加し続けてよいものかと思い悩んでしまうこともある。中心メンバーが思い悩んでしまったら、その団体の当事者活動の継続は、いよいよ怪しくなってくる。

当事者各人の今後の志向性も、決して一枚岩ではない。生き方という面においても、テレワークや社会的企業に代表されるような〈雇われない生き方〉、〈新しい生き方〉、〈オルタナティヴな生き方〉と表現されるような生き方を志向する人は、必ずしも多数派ではない。それぞれの当事者は、それぞれ様々な制約のもとで生活している。社会階層や地域性、家族や親族ネットワーク、学歴や職歴、ジェンダーやセクシュアリティ、自らの身体、社会規範といった社会学的なるものから、人々は決して自由ではない。

当事者同士の異なりは、コミュニティの存続をおびやかす。しかし、そもそも当事者自身の変化は必然であり、当事者それぞれの変化に応じてコミュニティが変容していくことは避けられない。

活動する場所と、場所のためのお金の問題

場所とお金の問題もある。自助グループやフリースペースなどの当事者活動は、地域の公民館（ないしそれに類似する）施設の部屋を借りて行われることが多い【写真 2】。兵庫県や神戸市が設置しているとある施設のように、都道府県ないし市町村によっては、条件はあるものの、登録団体に対しては比較的低額ないし無料で部屋を貸し出してくれるところもある。しかし地域によっては、公民館施設が廃止されたり、施設運営が民間業者へ委託されることを通じて部屋使用料が高騰するケースもままみられる。高額な部屋使用料は、基本的には活動参加者の頭割りとなる。ただ



写真 2
輪になってする自助グループ。
公民館施設を利用している場合が多い。

そうなると、活動に参加するために活動場所に行くだけでも結構な交通費と精神的負担がかかるのに、さらなる出費が重なってしまう。

一般の人々はたかが数百円か千円程度と言うかもしれないが、当事者にとっては大金である。「ひきこもり」は、社会的には家にとどまっていることが非難されているにもかかわらず（無論私としては、ひきこもる行為を非難することそれ自体に、規範によって身体を統制する、おそらく近代性にかかわるであろう問題を嗅ぎ取っているが）、当事者同士で集まる場所を作り、それを維持していく環境は、地域によっては厳しいものとなっている。その場合、当事者はいったいどこに集まればよいのか。

当事者活動の消滅と生成の連続

ある当事者団体が活動を休止したり、あるいは団体自体を終了させてしまうのは、確かに寂しいものである。設立からの歴史が長かったり、その地域である程度名が知れた団体であるならなおさらだろう。

その一方で、新しく生成される当事者団体や、団体とはいかないまでも小規模で草の根的な当事者活動も、最近ではよく見られるようになった【写真 3】。当事者活動への参加を通じて、「自分もやってみたい」と活動を始める当事者は案外多い。自助グループや「ひきこもり大学」、当事者研究会、居場所やフリースペース、農作業や同人誌活動など、やりたい人の志向性に応じて、当事者活動のバリエーションにも幅がある。



写真 3
最近始まったある自助グループでの一コマ。ボードゲームは、共通の話題がなくとも場を持たせるツールとして用いられている（写真は「カタンの開拓者たち」ジーピー（C））。

もしかしたら、特定の当事者団体の存続のみにこだわる必要はないのかもしれない。ある一つの団体が活動を終了したとしても、すでにある他の団体や、これから生成するであろう団体が、終了していく団体の活動の精神を部分的にせよ、あるいは批判的に受け継いでいくことができれば、総体としての「当事者活動」は維持されるのではないか。また、団体の中心メンバー間での考え方の違いなどにより、団体自体が分裂する事例もたまにあるが、分裂することでそれぞれの活動が維持できるならば、必ずしも避けるべき事態とは言えないのではないか。

団体間のネットワーク化の試み

したがって必要になってくるのは、たとえ異なる団体同士でも互いの活動実践を結びつける仕組み、すなわち、それぞれの団体や小規模な活動実践、あるいは人間同士を結びつける仕組みとなると思う。当事者同士では、当事者団体に限らず支援機関の口コミ情報が

流通しているが、それをうまく可視化してネットワーク化できないか。実は、そのような試みが、全国各地の当事者の間でなされ始めている。ポータルサイトや協議会、地域の支援機関マップ作りなど、団体同士の横のつながりを作ろうとしている試みが始まっている。

そのひとつに、近畿地方の当事者目線での「ひきこもり」支援機関マップを作ろうというプロジェクトがある（「社会的」ひきこもり・若者支援近畿交流会支援機関マッププロジェクト）。2015 年の夏ごろより始まったプロジェクトで、ひょんなことから筆者も参画することになってしまった。

その地域にどのような支援機関があるのか、案外知られていない現状がある。また、とくに「ひきこもり」という枠組みにおいては、近所の目を意識することもあり、自分の住む地域よりも、電車や車で行ける少し離れた場所での支援を望む当事者は数多い。さらに都市部の場合、交通網が発達しているので、電車にさえ乗れれば、多少お金はかかるけれども比較的遠くに行くことができる。したがって、その地域の支援機関を詳しく調べてまとめるだけでなく、より広域的な情報を網羅的かつ一元的にマップとしてまとめ、それをホームページなり冊子体にして必要としている人々に届けることはできないか。こういう思いが、プロジェクトメンバーに共有されたものとしてあったのだと思う。

もちろんこれまでも、都道府県ないし市町村のレベルでその地域の支援機関を調査し、まとめあげたマップは作られてきた。どれも力作揃いだし、大変価値があるものである。しかし、隣の町に、あるいは隣の県に、どのような支援機関があるのか。それをぜひ知りたいし、自分の住む地域の支援機関と比較検討もしてみたいと思う当事者たちは、やはり数多く存在する。それにこれまで作られてきたマップは、非常にすっきりした紹介にとどまっているか、あるいはそれぞれの支援機関が自らの実践を紹介したものばかりであった。実際に利用している当事者の口コミ情報は、その支援機関を知るうえで必要な情報であるにもかかわらず、また自助グループや当事者間のネットワークではかなり流通している実態があるにもかかわらず、おもてだって流通することはほぼなかった。

「だったら作ってしまえばいい」ということで、ひきこもった経験を持つ当事者を中心にメンバーが集い、当事者目線を大事にしながら、マップの作成がなされている。

「ひきこもり」の当事者活動自体、歴史も浅く、また活動自体も脆いものであるが、それを何とか乗り越えようとしている当事者たちの今後の動きに注目したいと思う。